サービスラーニングをふりかえって

社会福祉学部社会福祉学科２年　長谷川　舞
活動先：NPO 法人　エンド・ゴール
ゼミ：村上　徹也　先生

私は、特定非営利活動法人エンド・ゴールで６日間活動した。エンド・ゴールは、３本の柱で若者の人間力育成とキャリア支援を行っている。その３つは、①若者がキャリアについて気軽に学び、考え、相談できる場づくり，②様々な個人・組織と連携した若者の育成を促す仕組みづくり，③若者の成長の糧となるキャリアプログラムの開発である。その中で、私たちサービスラーニング生は、これからエンド・ゴールがつくっていく「若者支援基金」の土台を考えることを任せられた。

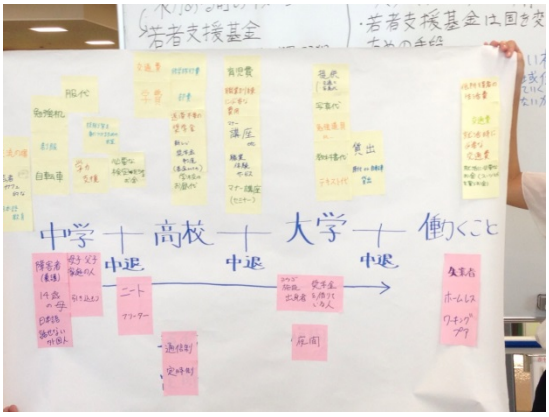
①　サービスラーニングを通しての自分の成長と気づき

サービスラーニングを通して自分が成長できたと思うことに、自分の意見を発言することができるようになったということがある。若者支援基金を考える話し合いでは基金をつくる理由、基金の方法、対象、課題などいろいろな面から私たちＳＬ生の考えを深めていった。６日間の活動の中で、自分の意見を発言しなければいけない場が多くあった。初めは、緊張などから受け身になりスタッフさんの意見を待つことが多かった。しかし、具体的なことを話し合っていくうちに、自分たちが土台をしっかり作りたいと強く思うと同時に、仲間との結団力も強まり、少しずつ意見を出し合えるようになっていった。また、活動先であるエンド・ゴールには他大学のインターン生も活動していた。その中で、年上のインターン生の発言などにいい刺激をもらうことができたのもこの自分の意見を発言できるようになった成長の理由だ。

活動２日目から毎日の目標を決め､他大学のインターン生と発表し合うようになった。このことにより、自然と１日１日高い意識で活動に臨めていたことにも気がついた。

活動で印象に残ったことに、地域のつながりの重要さ、地域住民の力がある。エンド・ゴールとつながりのあるＮＰＯ法人に見学に行ったとき、「えん」を大切にし、助け合いの精神で多くの人を結び付けていたＮＰＯ法人もあった。このとき地域には、住民の力という資源が多く存在すると気がついた。最近は、少子高齢で支える側の人手が不足している。しかし、つながりを持ち、声をかければ協力してくれる元気な高齢者が多くいることを知った。これからは、このような人たちの力が大きく社会に影響していくと感じた。このような地域の力をどんどん広めていくのが理想だと思う。

② 活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

若者支援基金について考える際、若者の現状をスタッフの方から聞き、衝撃を受けたことがあった。エンド・ゴールは、地域若者サポートステーションを運営している。就職に悩む若者やその保護者を対象としてキャリアカウンセラーを中心に、行政機関・地域のＮＰＯ法人・企業と連携してサポートをおこなっているのだ。しかしスタッフの方から聞いた話によると、エンド・ゴールへカウンセリングに来るため、大府市の家からエンド・ゴールがある半田市まで自転車で通ってくる若者もいたというのだ。他にも、就活をしたくてもお金がなくてスーツを買うことができないし、試験を受けに行くための交通費がなくて行けないといった若者がいたそうだ。エンド・ゴールがサポートしても支えきれない課題もあるとこの話を聞き気がついた。私は、これからこれよりさらに細かい支援が展開されることで支えることができる若者が増えると感じた。

私たちがＮＰＯ法人見学をしたことを振り返ると、高齢者や子育て中の母、子どもたち用の気軽に集える場所があるが、若者用の気軽に集える場所があるとは言えないという気づきがあった。これは解決すべき社会の課題だろう。もし、若者の集える場所があれば就職に困っている人たちが中心となって運営していき、就活などの相談をし合えるとともに、ピアサポートの場になるのではと思った。この気づきから、エンド・ゴールがこれからつくっていく若者支援基金を使ってまずはこのような居場所づくりから行ってほしいと感じた。